

中西進館長挨拶

『著者を呼び出す』

図書館が図書を蒐集、閲覧に供する以上、図書なくして図書館はありえません。そしてまた、文字がなければ図書はできません。

ところが現代においても、文字をもつ言語は世界中の言語の20パーセントにしかすぎません。書物が身のまわりにごろごろしているといった、もうほとんど当り前のわれわれの風景は、じつはきわめて高度で選ばれた社会の現象なのです。

そのように貴重な文字によって書かれた図書なのに、最近「文字離れ」だの「本を読まなくなった」だのと騒がれています。ここでもう一度、文字や図書の文明における価値を思い起こしてみるべきではないでしょうか。

人間の、文字をめぐる行為は「書くこと」と「読むこと」です。人間は書くことによって精神を成熟させ、心を豊かにし、思考を緻密にします。その結果でき上がった図書を読むことは、贅沢なまでに多数の人の感情や思想を我が物とします。「読む」と「呼ぶ」とは本来同一の行為だという説があります。書物を読むことは著者に向かって呼びかけ、著者の心を読み出すことなのです。考えただけでも、心躍る行為ではありませんか。

皆さん、書物を開いて著者に呼びかけてみましょう。どう質問すればどう答えてくれるか、楽しみです。ですから声を出して呼ぶ—読むのが、もっとも有効かもしれませんね。



京都市中央図書館
右京中央図書館
館長 中西 進